

星なき数多の夜に咲く

文——杜脇やさい 絵——シヤリ

世界から冬と星が消えてから十年でわかつたことは三つ。ひとつ、文明社会は星が見えないくらいじゃ止まらない。ふたつ、季節がひとつなくなつたくらいでも以下同文。みつつ、それでもその影は残ること。

だから十年ぶりに空に新しく星が点つたことで大騒ぎになつて、ニューズが私にはどうも馴染めなくて、フルーツグラノーラを淡々と口に運びながらどうでもいゝ疑問を投げかけるコメントーターと詳しいことはわかりませんが限りをなく回りくどく言つてのける天文学者のやりとりなんかこれっぽっちも聞いてない。それより大変なのは朝起きたら全身ふりふり真つ黒ドレスに身を包んだ女が宙に浮いていたことで、今もこうして向かい皿を並べてフルーツグラノーラとか食べながら呑気に挨拶なんかしてたりする。

「やつほー」

あくびをしながら寝室からのそのそ這い出てきていきなり挨拶された瑠璃色硝子は「……なにこれ。どっち?と訊くとまずテレビを指したので昨日寝てる間に世紀の大発見(ただし十年ぶり)があつただけと答えるとあつそうと興味無さげな返事、続けてふりふり服の方を指差すので私もわかんないと返事するとまたふうんと返事をして席について、一緒にフルーツグラノーラを頬張りだす。普段は風説とかバラエティとか大嫌いなはずの瑠璃色硝子のはじめてやつた失敗がこのフルーツグラノーラで、果物健康ダイエット!と力説するお茶の間の顔をそりやもう睥睨というか侮蔑というか、そんな顔で見てたくせに翌日たつぷり一週間はフルグラ漬けになりそうな量を買ひ込んだ。『いい奈空、変化は些細な事から始まつて気が

付かないうちに終わっているものなの。これもその一環」世間じゃそういうのをカモって呼ぶんだけど、と言うと「……わかっている。衝動買いというのを一回やってみたらいい。やつてみたくてやるものじゃないでしょそれって。

どの番組にしてみても新星の話ばかりで、「……そんなにありがたいのかな、あれ」と私はぼやく。「じゃない?やつぱり発見は発見だよ」とふりふり服。物心がつく頃にはもう星が消えていた私たちにとつて、ほしと聞いて思い浮かぶのは理科の教科書に載つていた色彩鮮やかな写真と社会科見学で必ず行かされるプラネタリウムだ。もちろん私はそういうのが大嫌い、そりやあなたたちにとつてはなくなつてしまつた過去なんでしょうけど私にとつては最初からないので、懐かしんだり慈しんだりする余地なんてないんですよ、と口から何度も出かかつた。冬にしたつてそう。そこら辺にいる三十代の人間を捕まえれば、俺が若い頃は十二月が来ると雪が降つて交通網が止まつたり、地域によつては積雪で水道管が止まつたりしてたんだぞ、今は楽になつたよな、なんて押し付けがましい思い出話の花が腐るほど咲く。小さい頃からこの手の話を聴くたびにうるせーと思つていたけど周りはいたい受け入れて、反感を持つてるのつて私だけ? たつたひとり反体制? とか不安がつてたけど、瑠璃色硝子ほもつと直裁で速くて決定的だつた。「星つて好き?」「嫌い。あんなの、嘘と盲信と迷信が光の形をしてるだけだし。水素と窒素と酸素の順列組み合わせだから」「冬は?」「寒いのをありがたがる人は変温動物にならばいいんじゃないの?」。

著名な学者からの生中継が終わつて、ようやく番組は星占いのコーナーに移る。射手座六位とか微妙ーと横目で眺めつつ、瑠璃色硝子は自分で淹れた紅茶を口にしたまま何も言ひそうにないのでようやく尋ねることにする、「……で、誰?」。不審者として通報してなかつ